

小児医療の現状と課題 益田赤十字病院第二小児科部長 中島香苗医師

1. 益田赤十字病院小児科の現状と課題

益田赤十字病院小児科は現在3名体制で、外来・入院・救急・新生児対応など多岐にわたる業務を担っている。小児科医の減少やマンパワー不足が続いており、看護師も常に募集している状況。平日外来はかかりつけ・紹介患者中心で、年間外来数は8,000件前後、入院は5-8%程度。感染症流行時は入院数が増加する傾向がある。

2. 小児救急・夜間休日対応の実態

土日・夜間の救急外来も小児科医が月1-2回程度担当。小児科医不在時は他科医師が対応し、必要時はオンコール体制で小児科医が呼ばれる。救急外来受診数はコロナ禍で減少し、日常生活が戻ってきてもそのまま推移している。受診の適正化が進み、不要不急の受診が減少したと言える。

3. 地域集散期母子医療センターとしての役割

益田赤十字病院は島根県西部で唯一の地域周産期母子医療センターに指定。新生児集中治療室（NICU）は未設置だが、妊娠30週からの早産児対応を行い、県内の他地域周産期母子医療センターよりも早期からの受け入れを実施。母体搬送を基本とし、必要時は高度医療機関へ転送。

4. 在宅医療・医療的ケア児への対応

医療的ケア児の在宅支援が増加。訪問看護師と連携し、24時間365日対応体制を構築。必要時は医師の往診も実施。地域の保育園や施設も医療的ケア児の受け入れに積極的で、保護者の就労継続支援にも寄与。

5. 小児医療の啓発・予防活動

・ 感染症対策とワクチン接種の推進

ワクチンで予防可能な感染症が増加し、特にRSウイルスワクチンの妊婦への接種も進んでいる。感染症流行時の対応や予防啓発活動も強化。

・ プレコンセプションケア

妊娠前からの健康管理（プレコンセプションケア）や妊娠期感染症予防の重要性を啓発。保健師等と連携し、地域住民への情報提供を実施。

・ 児童虐待防止・学校連携活動

児童虐待防止チーム（CPT）による研修・勉強会や、学校訪問による啓発活動を継続。子どもと家族を中心に、医療・行政・教育機関が連携して支援体制を構築。

・ 地域医療連携と市民への啓発

小児科開業医の減少により、内科医が小児診療を担うケースが増加。紹介状による受診や、かかりつけ医の重要性を強調。市民にも適切な受診行動を啓発。

#8000番（小児救急電話相談）の活用促進や、適切な救急受診の啓発を継続。市民の医療リテラシー向上のため、講演会・公開講座・イベントで情報発信。

看護師やスタッフの負担軽減も課題。

その他お知らせ

・ 今後のイベント・学習会案内

健康フェスティバル（10月26日）

次回学習会（11月28日、テーマ：精神医療）